心肺蘇生法に神様は必要か？

　タンタロス。

　ギリシャ神話において、タルタロスの著名な幽閉者は誰かと聞かれれば、妖精モドキの言ったそいつが挙げられる。具体的に何をしたのかは正直うろ覚えだが、確か息子を殺して神にご馳走として振舞ったという非人道的……いや、非神道的というべきか。そんな行為をしたが故、沼の上に吊るされて、水も食料も一切口に出来なくされたのではなかっただろうか。

　そして妖精モドキの話を聞くに、どうやら俺のこの知識はあっているっぽい。

「どうやってあそこから脱出したのかは分かりません。ですが、協力者がいたはずです」

　妖精モドキが、悔しそうに唇を噛む。

「タルタロスへと続く道は一本で、厳重な警備が敷かれていたのに……全滅していました。長い間幽閉されていたタンタロスが、たった一人で警備を突破するのは不可能です。協力者がいたのは間違いないでしょう。一体どんな奴かは知りませんが」

「……それで？　そいつが攻めてきた後は、どうなったんだ？」

　今の話も確かに気にはなったが、それよりも重要なのは、こいつ等がどうしてこっちに来たのか、である。こんな質問しておいて難だが、ここに妖精モドキがやって来た、という時点で、実は王宮がその後どうなったのか、俺には予想がついていた。

　そして、質問された後の妖精モドキが一瞬、恨みがましい目を俺に向けてきたのもあって、俺の予想が正しいことを裏付ける。

「……墜ちました。恐らく、今はタンタロスが自分の城としていることでしょう」

　予想通り、妖精モドキは消えるような声で、憎々しそうにそう呟いた。

「八人いる神のうち、七人の消息は不明です。恐らく、捕まったでしょう」

「捕まったら……どうなるんだ？」

　聞きたいような、聞きたくないような、俺は微妙な気持ちだった。

　だが、妖精モドキの顔に影が射したことが分かり、聞かなきゃ良かったと後悔する。

　俺のそんな気持ちに気がつかないまま、妖精モドキは言葉を続けた。

「捕まったら……間違いなく殺されているでしょうね。タンタロスにとって、八人の神は憎むべき相手でしょうから」

「……悪い」

　そう謝る俺に、妖精モドキはフルフルと首を横に振る。

「元より、覚悟はしていました。瞬様が気になさることはありません」

　だから『様』をつけるのを止めろ、とか、そんな言葉は今は出てこない。

　よく考えてみれば、妖精モドキのこの回答は、充分に予想出来たはずだった。自分を捕らえた者への復讐。ありきたりで、分かりやすい動機。何故気がつかなかったのだろう。

「……残りの一人の神様は、お前と一緒だったんだな？　昨日探していたのは、そいつだったんだろう？」

　そう聞くと、妖精モドキはコクンと頷く。

「私達は一旦、逃げることにしたんです。あのままでは、全滅は必至でしたから。他の方々に連中を食い止めてもらって、体勢と装備を整えて、もう一度タンタロスから王宮を取り戻すために」

「……どうするつもりだ？」

　八人のうち、七人の消息は不明。しかも死んでいる確率が高い。加えて、こいつの今の状況を見るに、他に仲間がいる様子は無い。さらに、一緒に来た最後の神は、未だ行方が分からない――こいつは、「探す必要は無くなった」と言っていたが――という始末だ。

　一体この状況から、どうやってタンタロス達と戦うつもりなのか。敵が昨日のテュポーンと同じ位だと仮定しても、妖精モドキは一匹倒すのがやっとだろう。

どう足掻いても、妖精モドキが無残に殺される姿しか思い浮かばない。完全に詰んでいる。

だが、妖精モドキには勝算があるようだ。どうしてそう思ったのか。それは……

真っ直ぐ、真剣な目で、俺を見ているからだ。

　いや、正確には『俺』では無く、もっと別の『俺の中の何か』を見ているような感じだ。

　すると、心なしか、俺の鳩尾の少し下の辺りが少し熱くなってきた気がする。

「瞬様。お願いがあります」

「だから『様』はいらん。で？　言っておくが、俺は昨日のあのテュポーンとやらと戦うのはごめんだからな？」

　一応そう言っておく。俺は花の男子高校生なのだ。こんなことで、自分の命を危険にさらすとか馬鹿げている。

　しかし、妖精モドキは俺のその言葉を、フッと軽く鼻で笑っただけだった。

　いや……確かに俺は無力だけどな。今のはどうかと思うぞ、貴様。一緒に食卓を囲んだ仲だろうが。つーか、さっきまでの真面目な雰囲気はどうした。

　なんて思っていたら、だ。

「誰も『戦ってくれ』なんて頼みませんよ。ただ、ちょっと何回か死んでほしいだけです」

「悪化してるわ！　阿呆かっ？」

　反射的に声を荒らげてしまった俺を責めるやつはいないだろう。というか、責めさせん。なんだ今の『何回か死んでくれ』って。『ちょっとお使い行ってきて』みたいなノリで言う台詞じゃ無い。

　いや、それ以前に。

「教えてやろう。人間っつーのはな、一回死んだらそれっきりなんだよ！」

「そんな事知っています。我々もそうですから」

　間髪入れずにそう言ってきた妖精モドキに、俺はもう一度ゴキブリまみれにしてやろうかと、本気で考え始めた。

　だが、こんな時に限って、ベッドの下にゴキブリはいない。

　大体、『グッドラック』みたいにウインクしてサムズアップしてくるそれはなんだ？　めっちゃイラっとくる。ああ、あれか？　こいつは人間じゃないから、生命倫理が俺達人間とは違うのか？

「ああ、すみません。ちょっと語弊がありましたね。『死んでくれ』は大げさでした」

「だとしても、『テヘペロ』みたいに舌を出して頭を掻いて言えば許して貰えるなんて思うなよ？」

「正しくは、『心臓を止めてくれ』ですかね？」

「変わんねーよっ！」

　どっちにしても、俺が死ぬ。

「駄目だ駄目だ。絶対駄目だ！」

「大丈夫ですよ。心肺蘇生はちゃんとやります」

「そういう問題じゃねえ！」

　心肺蘇生は、確実じゃ無い。五分以上心臓が止まっている場合、復活の可能性は半分位にしかならない。すぐに心肺蘇生を始めても、九割強の確率で生き返るが、裏を返せば一割弱の確率で死ぬのだ。

　だが、笑顔でそう言ってきた妖精モドキは、先程までのふざけた面を一変、真剣な顔で、頭を下げた。

　昨日の、俺に『護衛対象を探してくれ』と頼んだ時のように。

「お願いします。瞬様の命は保証致しますので、どうかお力を貸しては頂けませんか？」

「お……お前なぁ……」

　震える妖精モドキの声に、俺はそう言うしかない。昨日のあれとは違う。こいつの『保証』がどこまで信用出来るのか、俺には分からない。

俺と妖精モドキの間にはまだ、命を預けられるだけの信頼関係は出来ていないのだ。

そして何より、体の内側から、なんかこう、『首を横に振れ』とでも言うような衝動が襲ってくる。これは、第六感ってやつなのか。

　しかし……

「……たく、分かったよ」

　内側から湧き上がる衝動が、自分に警告しているかのように、さらに強くなる。まるで叩かれているかのように、なんかこう、物理的に痛い。

それでもどういうわけか――『ついうっかり』なのだろうか？――俺は頷いてしまったのだった。